非対称の伽藍構成を有するシヴァ教チャンディの成立過程について

A STUDY ON THE FORMATIVE PROCESS OF ŚIVAISTIC CANDIS
WITH ASYMMETRICAL LAYOUTS FOR THE TEMPLE COMPLEXES

小野 邦彦*

Kunihiko ONO

In view of the existing theories on the history of Central Java, this study first re-examined the completion date of the ruins constructed mainly between the basin and the plain in the southern part of the area, which are believed to be the oldest among the Śivaistic *candis* with asymmetrical layouts for their temple complexes. Second, the author compared the styles of architecture used between the fore-mentioned Śivaistic *candis*, and the Śivaistic *candis* whose remains are to be found in the northern mountainous areas of Central Java. As a result of this examination, it is now believed that what probably happened is that the moldings, bases and plan layouts seen in the Śivaistic *candis* found in the mountainous areas in the northern part went through a succession of changes and that they made their way into the region of the southern part. As a result of these changes, Śivaistic *candis* with features of such new styles of architecture as semi-circular cornices, plain bases and asymmetrical layouts for the temple complexes came to be in the southern part of Central Java by 732 AD at the latest.

keywords: Java, *candi*, Śivaism, asymmetrical layouts for the temple complexes, semi-circular cornice, plain base

ジャワ, チャンディ, シヴァ教, 非対称の伽藍構成, 半円縁形, 平滑型基壇

1. はじめに

西紀後初期の数世紀の間に、インド文化の潮流はインドネシア群島の沿岸を洗い始め、その後8世紀前半頃から16世紀前半頃までにかけて、ジャワ島を中心とするインドネシア群島には、インド文化を源泉とする、いわゆる「ヒンドゥー・ジャワ文化」が興隆している。その文化の下に創出された美術遺品の中で、インド起源の宗教、すなわちヒンドゥー教と仏教の神仏を祀る宗教建造物は、一般にチャンディ (*candi*) と総称されている。

中部ジャワ期 (8世紀前半頃～10世紀前半頃) におけるチャンディ造営の主たる舞台となった中部ジャワ地方一帯は、遺構の地理的な分布状況から、次の二地域に分けることができる。まず第一の地域は、ブラフ山南麓のディエン高原やウガラン山西斜面など中部ジャワ北部の山間地であり、なかんずくディエン高原には、ジャワ最古とされる一群のシヴァ教の遺構が現存している。そして第二に、中部ジャワ南部の河川 (プロゴ河、オパック河) の流域に広がる肥沃な盆地ないし平野部を中心とする地域が挙げられる。

拙稿で既に述べたように、上記の第二の地域、すなわち中部ジャワ南部の盆地ないし平野部を中心とする地域には、一見して左右対称の伽藍構成を遵守しているようにみえて、実際はわずかにその対称性が崩されているシヴァ教の寺院建築遺構が集中して残されている⁽¹⁾。

開闢壁内に適宜配置された祠堂群が、敷地の中心から若干ずらされることによって、伽藍は微妙に非対称となる。以下、このような伽藍構成を「非対称の伽藍構成」と呼ぶことにする。

しかしながら、非対称の伽藍構成を有するシヴァ教チャンディが、いつ頃、いかなる発展過程を経て成立したのかという問題を検証する試みは従来皆無に近い。この問題を考察する際に問題となるのは、肝心の中部ジャワ史には諸説あっていずれも定説たりえていないために、チャンディの建立期に対する編年論も研究者によって結論が大きく異なることである。さらに、ディエン高原のシヴァ教の遺構群をジャワ最古のものとみるのは従来からの定説である一方で、それらが発達南下して中部ジャワ南部の地に新たな展開をみせたのか、あるいは中部ジャワ北部とは系統の異なるシヴァ教寺院の建築様式が、中部ジャワ南部において並行的に展開したのかという問題に対する考察も十分に行われているとは言い難い⁽²⁾。

従って本稿では、まず、中部ジャワ史に関する従来の諸説に鑑みながら、非対称の伽藍構成を有するシヴァ教寺院の内、最初期のものと考えられる遺構の建立年次の再検証を行う。次に、中部ジャワ南部を中心に造営されたそれらのシヴァ教寺院と、中部ジャワ北部のシヴァ教寺院の建築様式とを比較対照した上で、前者の寺院建築様式が成立するに至った経緯の一端について明らかにしたい。

* 早稲田大学アジア建築研究会 工修

Asian Architecture Research Team, Waseda Univ., M. Eng.

2. 中部ジャワ期のシヴァ教寺院にみる非対称の伽藍構成

非対称の伽藍構成を有するシヴァ教寺院の内、中部ジャワ期に造営されたものとして、チャンディ・サンピサリ (Candi Sambisari)、チャンディ・ロロ・ジョングラン (Candi Loro Jonggrang)、チャンディ・グヌン・ウキル (Candi Gunung Wukir)、チャンディ・グヌン・サリ (Candi Gunung Sari)、チャンディ・イジョー (Candi Ijo)、チャンディ・バドゥ (Candi Badut、所在地：東部ジャワのマラン近郊) が挙げられる。ここでまず、上記の遺構の伽藍配置に認められる特質について確認しておきたい。

ほぼ正方形から成る圍繞壁によって取り囲まれた敷地の中央には、ヒンドゥー教シヴァ派のシンボルとされるリンガ・ヨーニないしシヴァ神像を安置する最も大きな祠堂 (以下、主祠堂と呼ぶ) が西ないし東面して配置され、またそれに正対して三基の建物が配置される⁽³⁾。三基の建物には、シヴァの乗り物である聖牛ナンディンの像や、小型のリンガ・ヨーニ等の安置されていたことが確認されているので、以下、それらの建物を副祠堂と呼ぶ⁽⁴⁾。図2のチャンディ・サンピサリは、主祠堂が西面する事例である⁽⁵⁾。

主祠堂及び三基の副祠堂は、東西に走る中央軸を持ち左右対称形に配置されるが、圍繞壁に取り囲まれた敷地の中央軸線上にはなく、全体に北側へずれて配置される傾向が認められる⁽⁶⁾。敷地の中心点は、主祠堂の正面階段翼壁と基壇の交差する隅の部分に一致し、またその地点に、十文字の刻線が記された特種な切石やリンガ状の立石等が置かれる事例も認められる⁽⁷⁾。敷地中心点が重要な地点として聖別され、その地点を避けるべく祠堂群がずらされている可能性が考えられる。さらに圍繞壁から等距離離れてほぼ正方形をなすライン上には、リンガ状の境界石等の指標物が、一辺につき三個ずつ、計八个配置されて結界を作っていると考えられる⁽⁸⁾ (図2)。

敷地中心点を避けて祠堂群をずらすことの理由は、インドに由来するヴァーストゥプルシャマンダラの觀念に求めることも可能であるが、その問題について詳しくは拙稿を参照されたい⁽⁹⁾。

一方、チャンディ・サンピサリにおいては、圍繞壁の外郭を32×32 (= 1,024) に分割するグリッドに従って、各祠堂の規模及び配置、そしてリンガ状の境界石の配置が定められ、またグリッドの基準格子の一辺の長さは、祠堂群のずらし幅に等しいと推測される点についても拙稿で述べた通りである⁽¹⁰⁾。サンピサリ以外の類例に、同じくグリッドに基づく配置計画法が用いられていたのかどうかという問題については、今後の研究を俟たねばならない。しかしなが

図1 中部ジャワ要図

ら、圍繞壁及び境界石等の指標物で二重に結界された敷地内に、主祠堂及び三基の副祠堂を配し、また敷地中心点が、主祠堂の正面階段翼壁と基壇の交差する隅の部分に一致するという伽藍の基本的な構成は、他の類例にも共通して認められるものである。さらに、圍繞壁の変更や副祠堂の増設等を裏付ける証跡に関する報告が今日まで確認されない点を併せて考慮すれば、上記六例のシヴァ教寺院における圍繞壁、主祠堂、副祠堂は、同時期に創建された可能性が高いものと考えられる。

中部ジャワ南部に現存する比較的規模の大きいヒンドゥー教チャンディの殆どが上に列挙されていることにより、これらの遺構にみる非対称の伽藍構成は、中部ジャワ南部に造営されたヒンドゥー教チャンディを特徴付ける配置型式であると考えられる⁽¹¹⁾。またこのような伽藍の基本的な構成は、後の東部ジャワ期のシヴァ教チャンディにも継承されている点が特筆される⁽¹²⁾。

3. 中部ジャワ期におけるチャンディの造営と史的背景

今日までの碑文研究の成果によって、8世紀以後の中部ジャワを支配していた統一王朝については、結論的に、ヒンドゥー教徒 (特にシヴァ教) のサンジャヤの王統及び大乘仏教徒 (特に密教) のシャイレンドラ王朝という二つの政権の存在を認める説が有力である。まず、プロゴ河流域を中心とするクドゥ南部地域から出土した西紀732年の碑銘を有するチャンガル碑文と、同じくクドゥ南部出土の907年の銘ある碑文の二つにより、サンジャヤと称する王を始祖とし、シヴァ教を信奉する王国が中部ジャワ南部に存在していたことが知られる。次に、シャイレンドラの名が登場する最初の碑文は、オバック河の流域平野を中心とするプランバナン地域近傍のカラサンから出土した778年の銘ある碑文であるが、同じくプランバナン地域のクルラクからも782年の銘ある碑文が出土しており、その碑文にもシャイレンドラの名がみえることにより、8世紀後半には仏教を奉じるシャイレンドラ王朝が中部ジャワ南部に

図2 チャンディ・サンピサリ 配置図

存在していたことが確認される。また、シャイレンドラの名を伝える三碑文が、ジャワ以外の地からも発見されている。

ドゥ＝カスパリスは、上記の碑文以外に新たな史料を加えて詳細な検討を行い、シャイレンドラ王朝とサンジャヤ王統との関係について新しい一石を投じている⁽¹³⁾。その論旨を要約すれば、次のとおりである。

先ず8世紀の前半には、クドゥ南部を中心にサンジャヤ王が勢力を持っていたものの、8世紀の後半にはシャイレンドラ王朝が中部ジャワ南部に覇権を確立することになる。サンジャヤの王統は、クドゥ南部へと進出したシャイレンドラ王朝に次第に押され気味となり、第三代のパヌンガラ王（780年頃-800年頃）の治世以後は、主として中部ジャワ北部の経営に集中するようになる。しかし832年頃までには、それまでシャイレンドラ王朝に対して従属的な立場に甘んじていたヒンドゥー教勢力がその支配から脱し、婚姻による両王朝の融合にもイニシアティヴを取った結果、シャイレンドラ王朝の権威は消滅し、中部ジャワ南部は再びサンジャヤ王統の支配するところとなる。

以上のドゥ＝カスパリスの説を支持するデュマルセは、中部ジャワ南部がシャイレンドラ王朝の支配下にあったと推測される780年頃から832年頃までにかけて、ヒンドゥー教チャンディの造営活動は中部ジャワ北部においてのみ行われたと類推した上で、中部ジャワ南部に現存する主要なヒンドゥー教の遺構を、いずれも832年以後、つまりシャイレンドラ王朝の勢力没落後に建立されたチャンディとして位置付けている⁽¹⁴⁾。

ドゥ＝カスパリスの説が、ともすれば異宗を信奉する二王朝の対立的な関係を軸に論証されていたものであったのに対して、ヨルダンは、中部ジャワ南部における、二王朝の平和的な共存・共栄と二宗教の混淆とを主張している⁽¹⁵⁾。ヨルダンは、この説を提示する際にとりわけ注目しているのは、先述のクルラクで発見された碑文である。この碑文には、東ベンガルから来たとされる師僧によって文殊師利の像が奉獻されたことが述べられており、また「この高貴な持金剛はブラフマー神であり、ヴィシュヌ神であり、マヘーシュヴァラ神（シヴァ神）であり、一切の神々を含んだものである」との一節が認められる。石井氏は、この碑文のいう文殊を「持金剛」の文殊、即ち密教の文殊師利に比定し、そしてヒンドゥー教の三主要神さえもが、「仏智」の顕れとして認識されていたと考えられる点について言及している⁽¹⁶⁾。

782年の年次を刻むこの碑文に、仏教とヒンドゥー教の意識的な混淆ないし融合が看取される点からみても、8世紀末以後の中部ジャワ南部に、二王朝が併存していた可能性は少なくとも否定されるべきではないと考えられる。例えば岩本氏は、先述のカラサン碑文の記述内容を改めて吟味した上で、二王朝相互の関連に係わる問題についての従来の諸説に補訂を加えつつ、8世紀の後半以後、シャイレンドラ王朝はプロゴ河流域に広がるクドゥ南部地域に、またサンジャヤの王統はオパック河以東、すなわちその流域平野であるプランバン地域を中心とする領域にそれぞれ勢力を分け持つて併存していたと考えられることを指摘している⁽¹⁷⁾。

以上のように、中部ジャワ期の二王朝の相互関係には諸説あって、いずれも定説たりえていないのが現状である⁽¹⁸⁾。千原氏も指摘するように、このような中部ジャワ史の諸説が、ジャワ、スマトラ、

マライ半島、インドなどの各地で発見されている若干数の史料と中国史書の記述とによって構築された多くの仮説を包含するものである以上、史的背景に多くを依存したチャンディの編年論には、自ずから限界があるものといえよう⁽¹⁹⁾。現に、ドゥ＝カスパリスの説を基本として組み立てられたデュマルセによるチャンディの編年論には、一部容認し得ない点も認められる。特に、780年頃から832年頃までを中部ジャワ南部におけるヒンドゥー教勢力の完全なる空白期とみなし、その時期に二王朝が中部ジャワ南部において併存していた可能性を予め否定してチャンディの建立期を推定している点は、再考を要するものと考ええる。

上記の留意点を踏まえながら、以下、非対称の伽藍構成を有するチャンディの内、最初期の遺構に属するとみられるチャンディ・グヌン・ウキル及びチャンディ・バドゥの建立年次について、デュマルセを含めた諸氏の見解を改めて検証することにした。

4. チャンディ・グヌン・ウキルの建立年次の再検証

チャンディ・グヌン・ウキルは、クドゥ南部のチャンガル村付近のウキル丘上に建立されたシヴァ教の遺構である。グヌン・ウキルの伽藍には、他の非対称の伽藍構成を有するチャンディと同様に、リング・ヨーニを安置する主祠堂と、それに正対する三基の副祠堂が配置されている（図3）。これらの祠堂群を取り囲む煉瓦造の圍繞壁は現在埋め戻されているために、現状の遺構から祠堂群の「ずらし」を確認することはできない。しかしながら、グヌン・ウキルの敷地中心点が避けられていたことは、スクモノ及びバーネット＝ケンペルスによって確認されている⁽²⁰⁾。

同遺構の建立年次については諸説あるのが現状であり、例えばフォグラーは、チャンディの装飾細部としてもっとも普遍的なカーラ・マカラ装飾（出入口や龕の額縁の装飾意匠に用いられるモチーフ）の形態を比較対照して諸遺構の編年を試みた上で、グヌン・ウキルの建立年次を928年以後に位置付けている⁽²¹⁾。グヌン・ウキルの建立年次を巡って常に論議の対象とされるのは、先述のチャンガル碑文の記述である。碑文はその書き出しにおいて、サンジャヤ王が732年に山上にリングを建立せしめたことと記している⁽²²⁾。しかしフォグラーは、碑文の発見地がグヌン・ウキルの寺苑から南へ150メートルの地点と距離的に離れすぎているとして、グヌン・ウキルの建立年次と碑文の記述とを関連づけることを否定している⁽²³⁾。

それに対しスクモノは、フォグラーが得た碑文の発見地に関する情報は、1937年に近隣の村民から得た伝聞を根拠とするものに過ぎず、情報としての信頼性に欠ける点を指摘している⁽²⁴⁾。チャンガル碑文は、元々1879年にグヌン・ウキルの門の傍から発見されていることがクロムによって指摘されており⁽²⁵⁾、また当時の古代遺跡・遺物目録にもそのように記されている⁽²⁶⁾。さらにスクモノは、チャンガル碑文の欠損部分が、1937年にグヌン・ウキルの寺苑内から発見されていることを指摘した上で、碑文の内容とグヌン・ウキルの建立との関連は明らかであると結論付けている⁽²⁷⁾。また、グヌン・ウキルは小丘の頂部に建てられており、その立地は「山上にリングを建立せしめた」との碑文の記述に符節するものである。

チャンガル碑文は、年次を有する碑文としてはジャワ最古とされるものであり、ここでスクモノの説に従うならば、グヌン・ウキルは、中部ジャワ南部に現存する全てのチャンディの中で、最初期の

図3 チャンディ・グヌン・ウキル 配置図

図4 チャンディ・バドゥ 配置図 (オランダ領東インド考古局による)

図5 チャンディ・バドゥ 配置図 (インドネシア教育文化省東部ジャワ州事務所による)

遺構に該当することになる。グヌン・ウキルの建立年次を、碑文に銘記された732年に比定するスクモノの解釈には千原氏も同調しており、また千原氏は、カーラ・マカラ装飾にのみ限定して建築の編年を試みるフォグラウの方法の限界をも同時に指摘している⁽²⁸⁾。

しかし一方で、先のフォグラウの説に同調するデュマルセは、グヌン・ウキルの建立年次を832年以後の間もない時期に位置付けている⁽²⁹⁾。このことに関連してデュマルセは、ボロブドゥール造営の第2期(782年頃～792年頃)に認められる、垂直面に僅かな相決りを施して重ねられる切石積み工法が、グヌン・ウキルにも用いられている点について言及している⁽³⁰⁾。しかしチャンディ・セウ造営の第一期(760年代後半頃～778年頃)において既にその工法が認められる点は、デュマルセ自らが指摘していることでもある⁽³¹⁾。従って、グヌン・ウキルがボロブドゥールの切石積み工法を踏襲して、782年以後に造営されたとは必ずしも断じ得ないはずである。

またデュマルセは、隣接する数個の石の間隙に楔石を打ち込んで、周辺の石同士を緊密に結合させる切石積み工法が、前述のサンピサリには頻用されているのに対して、グヌン・ウキルにはその工法が用いられていない点を指摘している⁽³²⁾。さらに、グヌン・ウキル及びサンピサリには、ロロ・ジョングランやイジョー等に認められる、二重の安山岩の化粧材の内部を火山性凝灰岩で充填する壁工法が用いられていない点についても言及している⁽³³⁾。

このように、グヌン・ウキルが比較的古い工法で築造されているとみられる点に鑑みれば、グヌン・ウキルの建立とチャンガル碑文の内容との関連を是認し、グヌン・ウキルを中部ジャワ南部で最も古い型の遺構とみなすことに、本来大きな問題はないものと思われる。にもかかわらずデュマルセが、グヌン・ウキルと碑文の内容との関連を否定するのは、グヌン・ウキルにおける非対称の伽藍構成を、832年以後のヒンドゥー教勢力の復興に伴ってインドから将来された新しい配置型式とみているからであると考えられる⁽³⁴⁾。

しかしながらその見解は、先に述べたドゥ＝カスパリスの説から類推された一つの憶説に過ぎず、具体的な根拠に基づいて実証されているものではない。すなわち、その推測のみをもって、グヌン・ウキルと碑文の内容との関連を否定するのは、根拠が不十分であるといわざるをえない。上記の諸点に鑑みて素直に解釈すれば、グヌン・ウキルの建立年次は、チャンガル碑文に銘記された732年とするのが、最も妥当であると考えられる。

5. チャンディ・バドゥの建立年次の再検証

東部ジャワのマラン近郊に現存する中部ジャワ期の遺構として知られるのがチャンディ・バドゥである。バドゥの伽藍には、リング・ヨーニを安置する西面する主祠堂と、それに正対する三基の副祠堂が配置され、それらをほぼ正方形をなす圍繞壁が取り囲んでおり、また祠堂群は北側にずれて配置されているのが確認される(図5)。

ところで、マラン近郊のディノヨからは、760年の銘のある、いわゆるディノヨ碑文が出土している。碑文にみえるアガスティア(尊師の姿をとるシヴァ)に捧げられた建造物を、バドゥと同定するか否かについて、カーラ・マカラ装飾を編年の資とする既述のフォグラウは、遺構と碑文の発見地とが離れすぎていると疑問視し、結果、バドゥの建立年次を中部ジャワ期の最末期(10世紀初め頃)に位置付けている⁽³⁵⁾。他方スクモノは、バドゥの建築全体の様式が中部ジャワ期の古い型を基調とするものであり、また造営第一期のチャンディ・カラサン(778年)やチャンディ・グヌン・ウキルと同様に、バドゥが線形や浮彫りを一切有しない平滑な断面からなる基壇を持つことからみて、760年をそのまま建立年次とするのは無理とはいえ、8世紀中頃の建立とすべきとの見解を示している⁽³⁶⁾。また千原氏も、このスクモノによる解釈に同調している⁽³⁷⁾。

しかし一方でデュマルセは、バドゥとディノヨ碑文との関係を大筋で認め、バドゥの建立年次を8世紀中頃とする解釈を認めるものの、9世紀に入りその伽藍配置には変更があったと推測している。デュマルセによれば、創建期のバドゥは、中心線AA'-CC'(図4)からなる方形の伽藍を有していたのに対し、寺院敷地の中心点を避けるべく圍繞壁が改変され、中心線BB'-CC'からなる伽藍が新たに創出されたという⁽³⁸⁾。なお、D及びEの箇所に置かれているものは、上部中央に正方形の穴が穿たれたおよそ50cm四方の切石である⁽³⁹⁾。

しかしながら既述のように、圍繞壁の改変を裏付ける証拠に関する報告は今日までないというのが実情である。また筆者が現地でも測量を行って検証した結果、オランダ領東インド考古局によって作成された図4は、インドネシア教育文化省東部ジャワ州事務所による図5(原図の縮尺が1/100)と比べ、十分な精度を有するものではないことが確認された。両図を比較すると、敷地中心点や副祠堂の位置関係が相当異なっていることが理解される。すなわち、建築学的な分析に必要な精度を有しない図4を根拠として、圍繞壁の改変の有無を論議すること自体に問題があるといわざるをえない。

また図5を見ると、バドゥの敷地中心点は、主祠堂の正面階段翼壁と基壇が交差する隅の部分にほぼ一致しており⁽⁴⁰⁾、これは他の類例にも共通して認められる特徴であることは既に指摘した通りである。さらにこれらの遺構の伽藍には、いずれもシヴァを祀る主祠堂に正対して三基の副祠堂が配置されている他、バドゥの敷地の南北から出土した台座状の切石（図4のD、E）は、チャンディ・サンピサリ等の寺院敷地の四方四維に位置する地点に配せられた、結果を示す指標物に類するものとみることが可能である。すなわち、他の類例に認められる伽藍配置上の特質が、そのままバドゥにも共通して認められる点に鑑みれば、バドゥがその創建時において、既に非対称の伽藍構成を有していたとみなすことには少しの不合理もない。さらに、732年の建立と推測されるグヌン・ウキルにおいて、既に非対称の伽藍構成が認められるのであるから、追って8世紀中頃に建立されたと推測されるバドゥにも、グヌン・ウキルと同様の配置型式が用いられたと考えることに矛盾するところはない。

6. 中部ジャワ北部山間地のシヴァ教寺院との比較

6-1. ジャワのシヴァ祠堂の祖型としてのチャンディ・アルジュノ

ジャワのチャンディの編年論は、研究者によって結論が大きく異なるのが実情であるが、ディエン高原のチャンディ・アルジュノ（Candi Arjuna）をジャワ最古の遺構とみる点に限り、大方の研究者の見解は共通している⁽⁴¹⁾。アルジュノが最も基本的な型式からなる祠堂であると考えられることは、千原氏によってすでに指摘されている⁽⁴²⁾。この点について改めてまとめてみると、まずその建築構成は、最下層の台状の基壇の上に函状の身舎を載せ、さらにその上に載る迫出し構造からなる屋蓋は、身舎の側壁と同じ構成を持った函形を段台状に数層積み上げたものとなっている（図7）。身舎及び屋蓋の段台の各層の軒先の四隅には、宝冠状のラトナと称するユニットが配せられる。また現在は消失しているものの、屋蓋の最頂部にもラトナが配せられていたと考えられる。身舎は正面にのみ入り口をもち、内陣にはリング・ヨーニが安置され、また入り口の両脇と残り三方の壁体外面の中央には壁龕が付され、またその中に、現在は消失しているものの、各々一基ずつの尊像が安置されていたと考えられる。そして入り口や龕の頂部には、カーラと称する鬼面像が、またそれらの堅柱の下端には、マカラと称する像が浮彫りされている。ジャワのチャンディの大部分を占める祠堂の殆どは、その建築構成、細部意匠などいずれをとっても、アルジュノを祖型とする変化形とみることが可能である⁽⁴³⁾。

6-2. シヴァ祠堂の尊像配置にみる規範性

中部ジャワの北部及び南部のシヴァ祠堂の主房及び壁龕（ないし側・後房）に安置される彫像の配列にも、共通の原則が看取される。中部ジャワ北部、ウガラン山西斜面のグドン・ソング（Gedong Songo）の第三コンプレックスの主祠堂の身舎に穿たれた壁龕には厚肉浮彫りの像が残っており、まず、正面入り口右の龕にはマハーカーラ、左にナンディー・シュヴァラ、背面（東）の龕にガネーシャ、北にドゥルガー、そして南にアガスティアの像が各々安置されている。これらシヴァの変化相ないしその眷属の像の配置は、シヴァ祠堂における尊像の典型的配置とされるものであり、この後チャンディ・ロロ・ジョングランのシヴァ祠堂を始め、非対称の伽藍構成を有するチャンディのシヴァ祠堂にもこの尊像配置の原則が用いら

れている⁽⁴⁴⁾。

ディエン高原のシヴァ祠堂において、既に上記の尊像配置の原則が認められたのかどうかは明らかではない⁽⁴⁵⁾。なぜなら、チャンディ・スリカンディ（Candi Srikandi）を除く祠堂の壁龕に安置されていた諸尊の像は現在すべて失われているからである。唯一、西面するスリカンディの南・北・背面の側壁の中央には、ピラスターで仕切られた浮彫りの像が現存し、北面のパネルには一面四臂のヴィシュヌ、南面には三面四臂のブラフマー、さらに背面（東）には一面四臂のシヴァが浮彫られている。こうした尊像の配列は、先述のシヴァ祠堂における尊像の典型的配置とは異なるものであるが、中央のシヴァの北側と南側に、それぞれヴィシュヌ及びブラフマーを配する図像的な構想は、チャンディ・ロロ・ジョングランに併祀された三尊の像を安置する祠堂の配置においても具現化されている⁽⁴⁶⁾。

以上、中部ジャワの北部及び南部のシヴァ教の祠堂の建築構成、細部意匠、そして尊像の配列には、一貫した規範性を看取することが改めて確認された。こうした原則が顕著に窺えることに鑑みれば、中部ジャワの北部及び南部に各々営まれたシヴァ教寺院は、基本的に系統を同じくする建築とみるのが妥当であると考えられる。

6-3. 伽藍配置にみる相違点

シヴァ神を祀るチャンディ・アルジュノは西面し、またそれに正対して矩形平面を有するチャンディ・スマール（Candi Semar）が配置されている（図6）。シヴァを祀る主祠堂に正対して矩形平面の建造物が一基のみ配置される伽藍の構成は、グドン・ソングの第二コンプレックス、またディエンのチャンディ・スリカンディにも認められるものである（図12）。加えてディエンのチャンディ・プントデウォ（Candi Puntadewa）においては、主祠堂の背後にさらに一基の建造物が配置されており（図12）、またグドン・ソングの第三コンプレックスは、主祠堂の両側にさらに二基の副祠堂を配置する伽藍構成を有している。シヴァ祠堂の正面に建造物が一基のみ配置される伽藍の構成は、中部ジャワ南部のシヴァ教寺院には確認されないものである。既述のように、非対称の伽藍構成を有するシヴァ教寺院の場合、主祠堂に正対して配置される副祠堂の数は三基となる。

アルジュノの正面に配置されたスマールの宗教的性格については明らかではないものの、デュマルセは、シヴァの乗り物であるナンディンの像が、創建時のスマールの内陣に安置されていたと推測している⁽⁴⁷⁾。シヴァ祠堂の正面にナンディンを祀る副祠堂を配する祠堂の配列は、非対称の伽藍構成を有する寺院でも確認される⁽⁴⁸⁾。さらにアルジュノの伽藍で特筆されるのは、東西に走る中央軸を持つ二基の祠堂が、圍繞壁で取り囲まれた寺院敷地のほぼ中軸線上に左右対称に配置されている点である（図6）。すなわち、非対称の伽藍構成を有するシヴァ教寺院は、スマールの両側に二基の副祠堂を配し、また敷地中心点を避けるべく祠堂群がずらされるなど、アルジュノの伽藍配置が一段と発展したものともみることが可能である。

一方、アルジュノに近接するプントデウォの伽藍は、短辺に比して長辺がかなり長い矩形となっており、また圍繞壁と祠堂は平行に配せられていない（図12）。その伽藍は左右対称形にはならないが、これまでに筆者が論じてきた中部ジャワ南部のシヴァ教寺院にみる非対称の伽藍構成とは明らかに異なっている。

図6 チャンディ・アルジュノ、スマール 配置図

図9 チャンディ・ブラオサン・ロール主祠堂の基壇及び身舎脚部のモールディング

図10 チャンディ・バドゥの基壇及び身舎脚部のモールディング

図7 アルジュノ立面図(西)

図8 アルジュノの基壇及び身舎脚部のモールディング

図11 チャンディ・ルンブンの基壇及び身舎脚部のモールディング

図12 チャンディ・スリカンディ、プントデウォ 配置図

線形を有するモールディングの構成は、仏教を奉じるシャイレンドラ王朝によってもたらされたものとされているが⁽⁵¹⁾、半円線形の存在が確認される遺構として最古のものは、シヴァ教寺院のバドゥである点に留意しなければならない。

千原氏は、上記のモールディング構成の中に、半円線形のような曲線断面、さらには歯飾りのような裝飾帯を有するタイプを「南方型」(図9)、そして反曲線形以外には曲線断面の線形を一切含まず、すべての凹凸が直角のみに終始しているアルジュノのようなタイプを「北方型」と命名し、中部ジャワ期の主要なチャンディの基壇及び身舎脚部のモールディングの類型化を行っている⁽⁵²⁾。千原氏の研究において、中部ジャワ北部に現存する数多くのチャンディのモールディング構成が「北方型」、また中部ジャワ南部のチャンディのそれが「南方型」を基調とするものであることが明らかにされた点は極めて重要である⁽⁵³⁾。

そしてまた、「平滑型」の基壇がディエンやグドン・ソングのシヴァ祠堂には認められない点を踏まえつつ、そのオリジンを「南方型」系に属するものと位置付けた上で、「平滑型」基壇のみを残すグヌン・ウキルの身舎が、半円線形を有する「南方型」系のモールディング構成からなっていた可能性について論じている点は注目値する⁽⁵⁴⁾。筆者が現地調査を行った際に、グヌン・ウキルの敷地内に瓦礫状に堆積された元の建材の中から、半円状に彫り出された切石が散見されたことから、千原氏の見解を推測として簡単に斥けることはできないと思われる。

しかしながら、その二系統のモールディング構成が、いずれかの方が古い型式で、他はそれから発展したというのではない、すなわち、インドからの二つの異なる文化導入のルートの下に並行的に成立したとする千原氏の立論⁽⁵⁵⁾に対しては、筆者は意見を異にしている。筆者は、モールディング構成を含めて祖型とみるにふさわしい中部ジャワ北部山間地の一群のチャンディが、発達南下して中部ジャワ南部の地に新たな展開をみせたものと考えている。

千原氏がモールディング構成の双系的な展開を論じる上で根拠としているのは、両系統の混用例、例えば「北方型」の基壇の上に「南方型」の身舎を載せるなどの遺構が存在しないという点である。しかし、クドゥ南部に所在するシヴァ教の祠堂であるチャンディ・ル

荒廃基だしいジャワのチャンディの中にあって、中部ジャワ南部に現存する主要なヒンドゥー教寺院の殆どが非対称の伽藍構成を有するものであり、またその伽藍構成は、後代の東部ジャワ期のシヴァ教寺院にも継続して用いられているという点を考慮すれば、古式を残すとされるディエンの遺構における上記の伽藍配置は、中部ジャワ南部のシヴァ教寺院にみる非対称の伽藍構成が成立する以前の配置型式であると推測される⁽⁴⁹⁾。

6-4. モールディング構成及び基壇型式にみる相違点

チャンディの基壇のモールディング構成についても、アルジュノは祖型とみるに相応しい特徴を備えている。まず、ベース及び上端の持ち送り部分が凸形反曲状に象られ(以下、反曲線形と呼ぶ)、またその間に挟まれた胴部の上・下端に、直角断面からなる帯状の突出部が挿入されている(図8)。拙稿で既に述べたように⁽⁵⁰⁾、アルジュノ以外の祠堂建築の基壇のモールディング構成は、帯状の突出部分が半円状に彫り出されたり(以下、半円線形と呼ぶ)、あるいは裝飾帯が挿入されるなど様々なヴァリエーションを持つが、原則としてアルジュノの基壇にみるモールディング構成を祖型とした上での変化形としてみる事が可能である。そして、こうした腰の括れた造形からなるモールディングの構成は、基壇上の身舎側壁のモールディングにも共通して認められるものである。

しかしながら、グヌン・ウキル、バドゥ、サンビサリ、イジョーの基壇は、浮彫りや線形を一切持たない平滑な断面からなっており(図10、以下、「平滑型」基壇と呼ぶ)、上述のモールディング構成とは基壇の型式が異なっている。とりわけグヌン・ウキルは、「平滑型」基壇が確認される最古のチャンディである点が特筆される。さらにバドゥの「平滑型」基壇の上の身舎脚部には、中部ジャワ北部のシヴァ祠堂には殆どみられない半円状に彫り出された半円線形の認められる点が注目される(図10)。従来の研究において、半円

ンブン (Candi Lumbung) は、半曲線形以外には曲線断面を一切含まない基壇⁽⁵⁶⁾の上に、半円線形を有する「南方型」系の身舎を載せた建築構成を有している⁽⁵⁷⁾(図 11)。また「南方型」系とされる「平滑型」の基壇を有するチャンディ・サンピサリの身舎には、「北方型」のモールディング構成が確認される。

そして、アルジュノに代表される中部ジャワ北部のシヴァ教寺院が、祠堂の建築構成、細部意匠、尊像配置等の面で、中部ジャワ南部のシヴァ教寺院の祖型とみるに相応しい特徴を顕著に備えている点については既に指摘した通りである。こうした建築ないし美術の様式上の一貫した規範性に鑑みれば、半円線形を有するモールディング構成及び「平滑型」の基壇は、祖型となる北部山間地のシヴァ教寺院のモールディング構成及び基壇型式の発展型ないし変化型と捉えるのが適当であると考えられる。また、半円線形及び「平滑型」基壇の確認される最古の遺構が、いずれも非対称の伽藍構成を有するシヴァ教寺院である点は極めて重要である。半円線形及び「平滑型」基壇という新たなモールディング構成及び基壇型式の導入に伴って、非対称の伽藍構成が創出されたとするのが妥当であろう。すなわち、半円線形、「平滑型」基壇、そして非対称の伽藍構成は、遅くとも 732 年頃 (グヌン・ウキルの推定建立年次) までに、中部ジャワ南部にもたらされた新たなシヴァ教の寺院建築にみる様式上の特質であると考えられる⁽⁵⁸⁾。

7. 結び

以上、中部ジャワの北部山間地に造営された古式を残すシヴァ教寺院にみるモールディング、基壇、さらには伽藍の型式が、発達南下して中部ジャワ南部の地に新たな展開をみせた結果、遅くとも 732 年頃までに、非対称の伽藍構成を有するシヴァ教寺院が成立するに至ったと考えられる点を指摘した。このような建築様式にみる変化ないし進展が、インドの新たな文化的な潮流を摂取した結果生じたのか、あるいはジャワにおける自律的な発展の下に生じたのかという問題を検討することはできなかったが、この点については稿を改めて論じることしたい。

一方、中部ジャワ北部から南部への単純かつ直線的な建築様式の発展という文脈では解釈できない事例も存在する点には留意しなければならない。例えばディエンには、いわゆるチャンディの基本型から逸脱した特異な建築構成を有するチャンディ・ビモ (Candi Bima) のような祠堂も認められる。また、中部ジャワ北部のスピン山東麓には、「平滑型」基壇を有するチャンディ・プリガプス (Candi Pringapus) の存在が確認される。さらに、グドン・ソングの第三コンプレックスの副祠堂は、例外的に「南方型」のモールディング構成を有するものである。この副祠堂のカーラは、後の東部ジャワ期のものにみられるような下顎を有するものであり、中部ジャワ期のカーラとしては稀な例であることからみて、第三コンプレックスの副祠堂は、後代に増設された建築である可能性が高い。すなわち、北部山間地に営まれたジャワ最古のシヴァ教チャンディが、発達南下して中部ジャワ南部の地に新たな展開をみせた後に、再び北上して寺院造営活動を再開した可能性は考え得るし⁽⁵⁹⁾、あるいは一旦南下した後であっても、中部ジャワ北部の地に留まって寺院の造営・運営に携わっていた勢力が残存していた可能性も考慮しなければならない。

謝辞

本稿のもとになる調査は、筆者が財団法人インドネシア石油教育交流財団の研究費助成を受けて、インドネシア科学院 [LIPI] の調査許可 (調査許可番号: 4861/II/KS/1997) の下に、1996 年 7 月から 1998 年 9 月にかけてジャワ島で行ったものである。また早稲田大学アジア建築研究会 (代表 中川武) が 1994 年に文部省科学研究費 (国際学術研究) の助成を受けて行った調査研究の成果も活用している。ここに記して、謝意を表したい。

注

- (1) 拙稿「古代ジャワの寺院伽藍に見る象徴性-ヒンドゥー教寺院の非対称の伽藍構成について」『建築史学』第 36 号, 2001, pp. 4-8
- (2) この問題に関する千原氏による見解は、以下、本文において改めて検討を行うものとする。
- (3) 例外的にチャンディ・ロロ・ジョングランでは、シヴァ神像を安置する主祠堂の南・北側に、各々ブラフマー及びヴィシュヌ神の像を安置する祠堂が配置されている。さらに、内苑の南北に各一株ずつ配置されているチャンディ・アピット (Candi Apit) と呼ばれる建物も、他に類例を見出し得ない。その内、北側の建物にはシヴァの神妃ドゥルガーの像が安置されていたとみられる点が指摘されている (Jordaan, Roy E. ed, *In praise of Prambanan: Dutch essays on the Loro Jonggrang temple complex*, Leiden: KITLV Press, [Translation Series 26], 1996, pp. 87-88)。
- (4) シヴァを祀る主祠堂に正対して配置される三基の副祠堂は、チャンディ・ロロ・ジョングランのそれを除き、現地ではチャンディ・プルワラ (Candi Perwara プルワラは侍女の意) と呼び習わされている。副祠堂に安置されていた神像等は、遺失している場合も多い。
- (5) サンピサリの圍繞壁は二重になっているが、外側のものは一部しか発掘されておらず、その全体の形状は明らかではない。
- (6) 前掲書注(1)pp. 4-8, 12-13
- (7) 前掲書注(1)p. 11
- (8) 前掲書注(1)p. 12
- (9) 前掲書注(1)pp. 13-17
- (10) ①河津優司・中川武・小野邦彦・御船達雄・池亀彰・梅ヶ枝浄・鈴木菜穂子「チャンディ・サンピサリの配置計画-インドネシア・チャンディ建築の設計方法の研究(1)」『日本建築学会大会学術講演梗概集』1995, pp. 543-544; ②小野邦彦・河津優司「インドネシア、ジャワ島のチャンディ」『アジアの歴史的建造物の設計方法に関する実測調査研究』(文部省科学研究費・研究成果公開促進費採択刊行図書) 第 2 篇, 早稲田大学アジア建築研究室, 1999, pp. 34-39
- (11) 中部ジャワ南部の比較的規模の大きいヒンドゥー教の遺構として、他にチャンディ・バロン (Candi Barong) が挙げられる。バロンの伽藍は、段台状に造成された三層のテラスから成るが、最上段のテラスに二基の建造物が配置されるのみである。この他のヒンドゥー教チャンディは、祠堂一基のみからなるとみられる小規模なものが多い。そして後に述べるように、非対称の伽藍構成は、中部ジャワ北部のディエン及びグドン・ソングの遺構群には現認されない。また一方で、中部ジャワ南部の主要な仏教チャンディの伽藍は、左右対称ないし四方対称の構成を遵守しているとみられ、非対称の伽藍を構成するシヴァ教チャンディとは対照を成していると思われるが、両宗教のチャンディの伽藍構成の詳細な比較考察は稿を改めて行いたい。
- (12) 東部ジャワ期 (10 世紀前半頃～16 世紀前半頃) のヒンドゥー教チャンディの内、チャンディ・キダル (Candi Kidal), チャンディ・ジャウィ (Candi Jawi), チャンディ・ランドゥアグン (Candi Randuagung), チャンディ・グラ (Candi Gurah) の四遺構の伽藍が非対称となることについては、前掲書注(1)pp. 7-10 を参照されたい。然るに、東部ジャワで最大の規模を誇るシヴァ教寺院であるチャンディ・パナタラン (Candi Panataran) の伽藍に配置された種々の建物の配列には一定の規則性を見出し得ず、文字どおり非対称の伽藍を造っている点は注目に値する。本稿で考察の対象とする「非対称の伽藍構成」、すなわち一見左右対称の構成を遵守しているようにみえて、わずかにその対称性が崩されるものとは異なっている。さらに東部ジャワ期のヒンドゥー教チャンディには、山腹から山頂へ向けて、数層のテラスを段台状に配置して伽藍を構成する遺構も少なからず認められる。
- (13) Casparis, J. G. De, *Inscripties uit de Çailendra-tijd*, Bandung, 1950
- (14) Dumarçay, J., *Histoire de l'architecture de Java*, Paris: École Française d'Extrême-Orient, [Mémoires Archéologiques 19], 1993, p. 287
- (15) Jordaan, Roy E., *Imagine Buddha in Prambanan; Reconsidering the Buddhist background of the Loro Jonggrang temple complex*, Leiden: Vakgroep Talen en Culturen van Zuidoost-Azië en Oceanië, [Semaian 7.], 1993; 前掲書注(3)pp. 3-115
- (16) 石井和子『サン・ヒアン・カマハーヤーニカン (聖大乗論)』にみる古ジャ

- ワの密教』『東南アジア研究』27巻1号, 1989, p. 58
- (17)岩本裕「Sailendra 王朝と Candhi Borobudur」『東南アジア - 歴史と文化』No. 10, 1981, pp. 17-21
- (18)いずれにしても、中部ジャワ期のジャワに二王朝が存在していたとする説が有力ではあるが、その一方で、中部ジャワ北岸のプラコガン市近傍のソジョムルト村から発見された、7世紀前半頃のものとする古マライ語の碑文中に見える、ヒンドゥー教の熱心な信奉者である Selendra という個人の名を、シャイレンドラ王朝の直接の祖先に比定することにより、中部ジャワ期の統一王朝は唯一シャイレンドラ王朝のみであったとみ、また歴代の王はヒンドゥー教か仏教のいずれかを選択して信奉し、改宗の自由も保証されていたとする説も提唱されている (Soekmono, R., *Chandi Borobudur, a Monument of Mankind*, Paris: Unesco Press, 1976, p. 9)。このような説すらも単なる憶測として斥け得ないという点に、中部ジャワ史の解明がいかに難渋しているかが集約的に表れているといえるだろう。
- (19)千原大五郎「中部ジャワのチャンディ建築に対する編年的考察」『日本建築学会論文報告集』第238号, 1975, p. 135
- (20)Soekmono, R., *Tjandi Merak*, Skripsi Sarjana Universitas Indonesia, Jakarta, 1953, p. 23; Bernet Kempers, A. J., "Prambanan, 1954", *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde* 111, 1955, p. 8
- (21)Vogler, E. B., "De stichtingstijd van de Tjandi's Gunung Wukir en Badut", *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde* 108, 1952, p. 316
- (22)Poerbatjaraka, *Riwajat Indonesia* Jilid I, Djakarta: Jajasan Pembangunan, 1951, pp. 53-55
- (23)前掲書注(21)p. 315
- (24)Soekmono, R., "The archaeology of Central Java before 800 A.D.", in R. B. Smith and W. Watson ed., *Early South East Asia: Essays in archaeology, history and historical geography*, New York, Kuala Lumpur: Oxford University Press, 1979, p. 462
- (25)Krom, N. J., *Inleiding tot de Hindoe-Javaansche kunst*, Vol. I, 's-Gravenhage: Martinus Nijhoff, [First edition 1920], 1923, p. 166
- (26)Verbeek, R. D. M., *Inventaris der Hindoe-oudheden op den grondslag van Dr. R. D. M. Verbeek's Oudheden van Java*, in: *Rapporten van den Oudheidkundigen Dienst in Nederlandsch-Indië* 1915, Batavia: Albrecht, 's-Gravenhage: Martinus Nijhoff, 1918, p. 262
- (27)前掲書注(24)p. 462
- (28)前掲書注(19)p. 135, 138
- (29)Dumarçay, J., *Candi Sewu dan arsitektur bangunan agama Buda di Jawa Tengah*, Jakarta: Puslit Arkenas, [Originally published in France, Paris: EFEO, 1981; translated by Winarsih Arifin dan Henri Chambert-Loir], 1986, p. 42
- (30)前掲書注(29)p. 39の注3)
- (31)前掲書注(29)p. 6
- (32)前掲書注(29)p. 42の注14)
- (33)前掲書注(29)p. 42
- (34)①前掲書注(29)p. 39の注3); ②Dumarçay, J., *The temples of Java*, Singapore: Oxford University Press, 1986, p. 42
- (35)前掲書注(21)pp. 313-346
- (36)前掲書注(24)pp. 462-463
- (37)前掲書注(19)p. 139
- (38)Dumarçay, J., *Le savoir des maîtres d'œuvre Javanais aux XIII^e et XIV^e siècles*, Paris: École Française d'Extrême-Orient, [Mémoires Archéologiques XVII], 1986, pp. 5-6
- (39)Haan, B. De, "Tjandi Badut", *Oudheidkundig verslag* 1929, Albrecht, 1930, p. 257
- (40)図5のトレンチa, b, cに、開続壁の隅とみられる直角部が掘り当てられたというSoemarno, A., *Laporan Penggalan Pengumpulan Data Candi Badut di Malang*, Departemen Pendidikan dan Kebudayaan Kantor Wilayah Propinsi Jawa Timur, Bagian Proyek Pelestarian/Pemanfaatan Peninggalan Sejarah dan Purbakala Jawa Timur, Surabaya, 1992/1993, pp. 14-16の記述に基づいて、敷地中心点のおおよそ位置を求めた。
- (41)スクモノは、アルジュノの推定建立年次を650~730年頃(前掲書注(24)p. 472)に位置付けている。一方、千原氏は680~730年頃(前掲書注(19)p. 140)、またデュマルセは750年頃(前掲書注(14)p. 287)としている。
- (42)千原大五郎『インドネシア社寺建築史』日本放送出版協会, 1975, pp. 99-103
- (43)仏教の祠堂の場合、ラトナの代わりに飾りストゥーパが配せられる等の相違はあるが、基本的にアルジュノの建築構成が祖型になっていると考えることが可能である。また、ジャワのチャンディの平面及び立面の構成を拘束する規範性については、小野邦彦・中川武・河津優司・御船達雄・池亀彰・梅ヶ枝浄・鈴木菜穂子「チャンディ建築の平面の類型-インドネシア・チャンディ建築の設計方法の研究(II)」『日本建築学会大会学術講演梗概集』, 1995, pp. 545-546; 梅ヶ枝浄・中川武・河津優司・小野邦彦・御船達雄・池亀彰・鈴木菜穂子「チャンディ建築の立面構成-インドネシア・チャンディ建築の設計方法の研究(III-2)」『日本建築学会大会学術講演梗概集』, 1995, pp. 549-550; 前掲書注(10)②pp. 40-45, 51-52を参照のこと。
- (44)シヴァ祠堂における尊像の典型的配置について、詳しくは前掲書注(10)②pp. 43-44を参照されたい。
- (45)しかしながらディエンからは、出所不詳のガネーシャ、ドゥルガー、アガスティアの像が多数発見されている点は特筆される。
- (46)前掲書注(1)p. 4-5
- (47)前掲書注(34)②p. 14。ディエンのチャンディ・プントデウォから、ヨニ及びナンディン像が発見されたことが、オランダ領東インド考古局による考古学遺跡・遺物目録から確認されることから(前掲書注(26)p. 338)、プントデウォの類例とみられるアルジュノに正対するスマールに、ナンディン像が安置されていた可能性は十分にあると思われる。
- (48)シヴァ祠堂の正面に配置される副祠堂にナンディン像の安置されていることが確認されるのは、グスマン・ウキル、ロロ・ジョングラン、イジョーである。
- (49)グドン・ソングの遺構群においては、開続壁の存在自体が確認されていないために、祠堂群の「ずらし」の有無を判別することはできない。一方、ディエンに存する八遺構の内、アルジュノ、スリカンディ、プントデウォを除く五遺構は祠堂・基のみからなるチャンディであり、また開続壁の存在も確認されていない。
- (50)①池亀彰・中川武・河津優司・小野邦彦・御船達雄・梅ヶ枝浄・鈴木菜穂子「チャンディ建築の立面計画/モルディングの類型-インドネシア・チャンディ建築の設計方法の研究(III-1)」『日本建築学会大会学術講演梗概集』, 1995, p. 547-548; ②前掲書注(10)②pp. 46-50, pp. 51-52
- (51)前掲書注(24)p. 463
- (52)①前掲書注(19)pp. 136-137; ②千原大五郎『東南アジアのヒンドゥー・仏教建築』鹿島出版会, 1982, pp. 122-132
- (53)しかしながら千原氏は、クドウ南部に「北方型」のチャンディが営まれていた可能性は否定していない(前掲書注(52)②p. 131)。
- (54)前掲書注(19)p. 137; 前掲書注(52)②p. 125
- (55)前掲書注(19)p. 137; 前掲書注(52)②pp. 123-124
- (56)ただし、ルンブンの基壇の持ち送り部分には帯状の装飾浮彫りが挿入されている点には注意しなければならない。ルンブンの基壇は、反曲線形以外には曲線断面を一切有しないにも係わらず、装飾帯が彫り出されており、千原氏のいう「北方型」と「南方型」の両者の特徴を兼ね備えたものであるといえよう。また、プランバナン地域のヒンドゥー教チャンディであるチャンディ・パロンの基壇も、反曲線形以外には曲線断面を有しない一方で、帯状の歯飾りが浮彫りされており、これも「北方型」と「南方型」の混用例とみるのが妥当であると考えられる。
- (57)クドウ南部の仏教チャンディであるチャンディ・ガウエン(Candi Ngawen)第二祠堂も、「北方型」の基壇の上に「南方型」の身舎を載せた遺構である(前掲書注(50)①p. 548参照)。
- (58)スクモノは、バドゥの建築全体の構成が古式を残すものとしながらも、グスマン・ウキル及びバドゥのカーラ・マカラ装飾を、ディエンのそれと比べて新しいものとして位置付けている (Soekmono, R., "Indonesian Architecture of the Classical Period: A Brief Survey", *The Sculpture of Indonesia*, Washington: National Gallery of Art, 1990, p. 69)。そしてこの点については、本文で述べたフォグラウの見解にスクモノは同調しているといえるだろう。こうしたカーラ・マカラ装飾にみる変化は、筆者が本文で明らかにした寺院建築様式の変化に対応したものとみれば納得が行く。
- (59)東部ジャワのマラン近郊にあるチャンディ・バドゥが、760年の銘あるディノヨ碑文を建てた社会集団に帰せられる可能性が高い点は本文中で既に述べた。そしてチャンディ・バドゥと、クドウ南部にあって732年の建立と推定されるチャンディ・グスマン・ウキルの建築様式が種々の点で類似し、また8世紀の中頃には仏教を奉じるシャイレンドラ王朝が中部ジャワ南部に急激な台頭をみせたことを併せて考慮すれば、シャイレンドラ王朝の興起に伴う政治情勢の変化に伴って、ヒンドゥー教勢力の一部が東部ジャワへ移動した可能性も考えられよう。それと同じように、中部ジャワ北部へと移動したヒンドゥー教勢力のあった可能性も考慮されるべきであろう。
- 図版出典: [図2], [図6], [図8], [図9], [図12] (早稲田大学アジア建築研究会作成); [図4] 前掲書注(39)Pl. 5; [図5] 前掲書注(40)に添付された伽藍配置図; [図7] 前掲書注(38)Pl. III; その他の図面は筆者作成

(2000年11月10日原稿受理, 2001年2月20日採用決定)